



佐呂間町企画財政課
財務係長

武田 温友

『ふるさと』づくりを
目指して

先 日、子供の通う小学校から近隣の市の小学校に転勤となった先生に会う機会があった。

その学校は知名度の高い団地街の中にあり、マンモス小学校の印象を持っていたが、会話の中で一言で時の移り変わりと言うものを実感した。

「僕の学校は一学年たった二クラスですよ。団地として整備されてきた当初は住民の年齢層も若かったけど、その人たちがそのまま年を取っ

て定年を迎える年代になっていて、小学生を抱える世代が少なくなっているのです。まあ、住宅街の高齢化っていうことですよ」

これを聞いて、私は考えたことがあった。

都会に住む子供たちにとって、お盆、お正月に「親」と一緒に帰省する『ふるさと』とは、以前は農村部漁村部などの祖父母の住む田舎で、都会では体験できない大自然とのふれあいを貴重な思い出として心に刻み込むことができた。

しかし、今、その「親」が祖父母となり、自然とのふれあいを体験した子供たちが親となり、その子供たちを連れて帰省する場所はもはや「田舎」ではなく都会の住宅街となっているのである。

このような時代背景で、子供たちのころに『ふるさと』という文字が刻み込まれることは非常に難しいのではないだろうか。

このように考えると、今、自然豊かな「田舎」の果たすべき社会的役割は日本の将来の存亡を賭けるといっても過言ではないくらい重要なものになっており、地域振興のヒントはここにあることに気がつきました。

「都市型社会の構造的な限界」「少子・高齢化、過疎化による地域の存続危機」といった現在の日本が直面している大問題。さらに、地方交付税の問題など、限りある予算の中で都市と地方の配分のあり方が問われていますが、都会と田舎の均衡ある発展なしに日本の将来展望はあり得ないと思います。

そのためには、お互いがお互いを理解し合い、都市、田舎がそれぞれの役割分担を明確にして

「都市と田舎のこころの交流」を積極的に推進する必要があります。

今、地域を越えた使命として、次代を担う子供たちのために夢とやすらぎの持てる「こころのふるさと」をつくり上げることが、「田舎」に住む私たちの役割なのではないかと思っています。